

# 大韓帝国における愛国唱歌教育運動と統監府の取り締まり —教育警察の出現を背景として—

朴 成 泰

The Movement of Teaching Patriotic Songs and the Control by the  
Residency – General in South Korea  
: In the Context of the Emergence of the Educational Police

PARK Sungtai

(Received December 17, 2003)

キーワード：唱歌教育、民族学校、キリスト教主義学校

## はじめに

韓国音楽教育史からみると、民衆が日常生活と深い関わりをもつ農業や商業とは別に民族精神、生存権利、教育要求などを積極的に求めたことは、歴史上幾つか存在するが、近代に入って具体的に主張したことは、甲午農民戦争（1894年）である。甲午農民戦争は、腐敗官僚の悪政が引き起こした最大の戦争であり、厳しい身分制度と人権問題が問われた民族発展の要素を含めた歴史として位置づけられる。

甲午農民戦争とは異なる歴史は日清戦争、日露戦争である。これらの戦争は豊かさや生き方を求めるものではなく、近隣国家の占有行為として展開され、近世国家に対する近代国家の支配構造を形成したと言える。

とりわけ北東アジアでは、いち早く近代化された新生日本は、政治、経済、軍事、制度、教育などに著しい発展を成し遂げ、その威力と底力は近隣諸国の占有行為として現れ、近代北東アジア史の行方に多大な影響を与えた。

このような日本の歴史的進展は天皇制国家、軍事大国のイデオロギーのみならず、学校教育、ことに音楽教育においても強い影響を及ぼし、良し悪しは別問題にしても、日韓両国の教育政策及び音楽教育に決定的な方向付けをしたと言える。

従来、この分野の研究は、抗日運動としての唱歌教育、占有行為としての唱歌教育が中心であるが、前者が注目されたと考えられる。その背景は、韓国民族が日本支配になるべく屈せず、常に抵抗したという歴史を日韓近代音楽教育史の基本的姿勢として捉えている。しかし、後者の占有行為としての唱歌教育は批判の対象として考察されるが、占有行為を視野に入れた総体的分析が行われない限り、真の日韓近代音楽教育史の姿は見えない。

したがって、本稿では、韓国の抗日教育を背景に日本の対韓音楽教育政策の一環として、とりわけ第二次日韓協約締結直後、亡国の立場に置かれた大韓帝国と日本との間に熾烈に展開された愛国唱歌教育運動と統監府の取り締まりの内実を明らかにしたい。

## 1 民族学校の愛国唱歌教育運動

韓国近代教育史研究における領域区分は、かつて阿部洋氏が民族系、キリスト教系、日本系として分類しており、筆者も本稿をはじめ、すべての原稿は概ねこれら3領域を堅持している。

韓国において音楽教育は、厳密に言えば、音楽そのものがキリスト教から受容され、民衆による民謡、伝統音楽以外の音楽は、キリスト教会や信徒から伝えられた。それが韓国語で歌われたという経緯からみると、これは厳格にカテゴリを決めることができないし、その意味もあまりないと思われる。

まず唱歌という用語について音楽学者の魯棟銀氏は、『歌(ノレ)を歌う』のように動詞的に使われたり、『歌を歌う芸者』という意味で『唱歌婢』のような用語もあるが、他の音楽用語に比べると、一般化されなかったという。その理由は、当時の『唱歌』がほとんど『芸者たちが歌う歌』と認識され、性理的な礼楽論の立場にある支配階層の両班が軽視したところである。『音楽』は『礼楽』であり、内容は『詩、歌、舞』のジャンルを部分的に示す場合の用例として使われた。しかし、『楽』とは用語より一般化されなかった<sup>1)</sup>という。また、魯棟銀氏は、韓国最初の音楽用語について「徐有榘(1764~1845年)の『林園経済誌』を通して、洋楽を最初から『音楽』とは呼ばなかった。その代りに、『彼らの音』という意味をもつ『彼音』が使われた<sup>2)</sup>という。学者の李圭景(1835~1849年)も『欧鐵絲琴字譜』から西洋音楽を「西洋の音」という意味から「西音」と呼ばれた。後に彼は、西音を「西楽」と呼び直している。<sup>3)</sup>音楽教育史研究者の柳徳熙氏は、「唱歌という言葉は、もともと歌を歌う。すなわち、歌詞に拍子とアクセントがある曲を付けて歌を歌うという意味である。我が国においては在来の歌詞に西洋式の曲を付けて歌うことを言う。それによって歌詞の形式も変わった<sup>4)</sup>という。このような唱歌の由来をみると、韓国の唱歌は日本から伝わったものではなく、自ら洋楽を導入したものだと言える。

新しい変化としては、韓国に唱歌という洋楽が導入されても、後に韓国と韓国人に適する韓国唱歌の生成過程がみられる。当時の韓国唱歌は、最初の大衆新聞『独立新聞』に多く掲載されたが、投稿者は強烈的な開化意識をもつ有志であった。

事例として学部(文部省)主事の李ピルキュンの《大朝鮮自主独立愛国歌》は、「アジアに位置する韓国独立は間違いない 斉唱—イヤエヤ愛国しよう 国のために命かけよう 粉骨砕身して忠君愛国しよう 斉唱—イヤエヤ我が国を高めて わが郷土救おう 熟眠から目覚めて富国強兵を目指そう 斉唱—他国に舐められ悔しさ耐えられない 協力しよう 団結しよう 国防態勢強めよう 斉唱—農工商業に尽力し 民衆と自由を求めよう 男女区別なしに入学し 万国知識を学ぼう 斉唱—教育こそ開化の道 開化こそ先進臣民 八卦国旗を高らかに掛け 世界に誇りを持とう 斉唱—山は高く川は深く 我らの心を誓おう<sup>5)</sup>と歌われた。

また、仁川のジョンキョントクの《愛国歌》を取り上げると、「奉祝しよう奉祝しよう 我が国太平を奉祝しよう うれしいうれしい自主独立うれしい 花咲け花咲け我が名山の花咲け 香ばしい香ばしいわが国香ばしい 実れ実れ富国強兵実れ 頑張ろう頑張ろう 忠君愛国頑張ろう 尽くそう尽くそう土農工商尽くそう 輝かしい輝かしい我が国旗輝かしい 時めき栄え時めき栄えわが万民時めき栄え 偉い偉い我が国王偉い万歳万歳万々歳 力溢れる勢いで世界に頭角を現せよう 万国が憧れる国を作ろう<sup>6)</sup>と民衆へ希望に溢

れる未来を歌っている。

このような愛国唱歌は、『独立新聞』がハングル刊行となり、漢文を好む儒教思想に陶醉した両班貴族から軽視されたハングルは、一躍その効用と価値が評価される。一般社会に初めて新聞が与えられ、その紙面こそ彼らの新世界を構築している。音楽教育学者の柳徳熙氏は、この点について「独立新聞に発表された多くの歌詞は8.8調である。その内容は開化思想を帯びながらも、旋律は古歌調である(趙芝薫『韓国文化史序説』)。すなわち、これらの《愛国歌》は、古来の打令調や民謡調で歌われ、決して洋楽ではない。[中略]とにかく多くの《愛国歌》《独立歌》が1895年を境に現れた。これらは在来の民謡調から漸次的に変化され、洋楽に合わせて歌われた。これは韓国音楽教育史における20世紀初頭を示す、いわゆる唱歌という新しい形態の楽曲を生み出した」<sup>7)</sup>と力説している。

ところが、このような音楽教育の発展は、単なる時代の流れで現れたものではなく、その起源を遡れば、東学農民乱時代から記録が残されている。1861年、慶尚南道山清郡舟城面から歌われた《舟城の哭声》は、比安地域(現在、慶尚北道)で「貪官がいるから比安は不安・・・」という歌詞が抵抗歌として叫ばれた。<sup>8)</sup>このような歌は、すべて封建制度の租税収奪と土地使用料の過剰徴収に対する不満と抵抗の歌である。

魯棟銀氏は、農民の抵抗歌のみならず、実際の近代音楽は開国を象徴する江華島条約以後、西洋音楽の受容通路は大きくみると二つがあり、それは軍楽と教会音楽を取り上げている。その事例をみると、李銀突は1881年11月、日本の「教導団基本軍楽隊」に留学し、フランス軍楽隊指導者のタグロン(Gustave Charles Dagon)からコネット(Cornet)と信号喇叭、軍楽隊教育、軍事教育を受け、1882年10月10日に帰国している。<sup>9)</sup>しかし、李銀突は帰国後、音楽活動の報告はない反面、清国の支援を受けて王室の親軍右宮に初めて信号喇叭手4名を養成しており、彼らは「銅号手」と呼ばれた。

甲午農民戦争と日清戦争以後、自主独立、文明開化への努力は政府や先覚者だけではなく、一般社会の民衆にも広く伝えられ、その開化思想は音楽教育にも表れている。例えば、楊州郡李ジュンオンの《同心歌》では「虎をみて犬を描く 鶴をみて鶏を描く 文明開化は実用が一番なり 池の魚は眺めず網で取ろう 網張りは難しくない 同心団結で取ろう」<sup>10)</sup>と歌われた。学部主事李ピルキュンの《大朝鮮自主独立歌》では「韓国の自主独立は間違いない エヤエヤ愛国しよう 国のため命を捧げよう 粉骨砕身するまで 忠君愛国しよう 我が政府を強めて 我が町守ろう」<sup>11)</sup>と歌われた。このように、当時の愛国唱歌は啓蒙的性格を表わしており、民族精神と希望に溢れる民族団結を呼びかけている。魯棟銀氏は、当時の音楽文化を「すべての民衆の歌が物語るように、一定の音の制度に位置づけられ、民謡として歌われる「替歌」方式であり、「即興的替歌」という点から伝統リズムと旋律の即効性が豊富である」<sup>12)</sup>と解釈している。

甲午農民戦争は、民衆から愛国精神が発露する重要な契機となり、反帝国、反封建を歌として表現した。魯棟銀氏は「内側に対応する歌は《夢中老少問答歌》や《安心歌》などが歌われ、外側に対応する歌は《勸学歌》などである」<sup>13)</sup>と分析している。甲午農民戦争は、音楽的性格も個性を表わし「1894年、東学抗争時《刀の歌》《鳥よ鳥よ八王鳥よ》など」「喇叭を吹く、鉦を打つ、びょうを叩きながら太鼓を鳴らす」ことになり、「音楽的に進展した内容が現われ始め、トゥレ風物の信号用楽器として出来上がる。[中略]トゥレ風物が甲午農民戦争当時に官軍の西洋軍楽隊の曲号隊や日本軍の軍楽隊に対抗できる反外部势力的な民族音楽としても浮上した」<sup>14)</sup>と分析している。

1894年は甲午農民戦争による日清戦争の勃発、政府組織改造である甲午改革、日本の浪人らによる閔妃暗殺、断髪令公布など激動の時代を迎えるが、その最中でも政治的変動は必ずしも暗いものだけではなく、確実に近代化への軌道に乗ろうとしており、その希望の光はかすかに見え始めた。

このような時代の変化は『独立新聞』を中心に愛国唱歌教育運動が繰り広げられ、ソウル廟洞の李ヨンウの《愛国歌》は、「大朝鮮国人民よ 熱烈に愛国しよう 国王に忠誠して 平安時代を築こう 喜ばしい喜ばしい 上下ない我が同胞 河が綺麗けど広い我が心 全員軍人となり戦おう 全身が粉碎しても 国のための光栄なり 黄河が沈むほど 海軍陸軍を奉祝しよう」<sup>15)</sup>と歌われる。また、警務学徒も新しい時代を祝う愛国唱歌教育運動として「頑張ろう頑張ろう 我が国警務頑張ろう 学徒は勉学しよう 政府を助けよう 政府を助けたら 民衆を守ろう 警務官吏になると 私の任務は大きい 政府を支えよう 永遠創成守ろう 法官の手足になり 治安警戒に尽くそう 万歳万歳万々歳 大君主陛下万々歳」<sup>16)</sup>と民衆のみならず、警官においても国家近代化に自ら参与している姿が投影されている。

このような国家近代化と自主独立の願望が強められると、民族指導者らは永年の中国属国から独立した喜びを記念し、漢城（ソウル）に独立門を建てた。これを祝う愛国唱歌としてヤンソンの金ソクカが《独立門歌》を作り「我が朝鮮臣民は独立歌を聴いて 丙子之寿を設け 自主独立うれしい 独立門を建てたら 独立歌を歌おう 我が朝鮮臣民は尽忠報国しよう 我が国王は有徳なり 自主独立うれしい ヨンジュ門を壊し 独立門を高らかに 我が国王万歳 我が臣民よ団結しよう 朝鮮五百年以来の晴れ日 独立門うれしい」<sup>17)</sup>と歌われた。

民族学校は、キリスト教主義学校より時期的に遅れて登場したが、民族学校そのものより、むしろ一般社会から愛国唱歌教育運動が普及し、民族学校へ刺激を与えた部分が多大である。その背景は韓国社会の遅れが学校教育の普及に決定的な影響を与えられず、愛国唱歌教育運動は社会から先行していたことが原因である。

このような事情から、学校教育に本格的に愛国唱歌教育運動を促したきっかけは、『独立新聞』（1896年9月22日）の論説に「われわれは、韓国政府の官立学校が校庭に国旗を掲げて毎朝、生徒らが国旗の前に集まり儀式を行うと共に、国歌である《愛国歌》の制定を必要とする。また、学校においては、毎朝の日課前の儀式として《愛国歌》を高らかに斉唱しなければならない。そして儀式唱歌《愛国歌》のようなものは、学部から制定委員会を構成し、歌詞を確定すれば、外国人に作曲を依頼することが望ましい。《愛国歌》ができあがると、教員らに歌唱法に関する研修を行うと彼らが学校に戻り、生徒らに教えることが最良である」と訴えている。<sup>18)</sup>

このように、1860年代は、甲午農民戦争という変革を通して、腐敗した朝鮮政府に対する民衆生存を求める抗争に自然発生的に愛国唱歌が現われた。それは口伝という伝承方法が機能し、音楽教育の可能性を潜めている。また、日清戦争後、永年の中国占有から抜け出した韓国は、信奉した漢文世界に縛られず朝鮮固有のハングルが広く使われるようになった。最初の大衆新聞『独立新聞』はハングルで刊行され、民衆は政治、経済、軍事、教育などの文明社会を共有しようとした。新しい時代には中国の宮殿音楽である雅楽などではなく、民衆による時代を享受する愛国唱歌として開化、文明、啓蒙、民権が歌われはじめ、愛国唱歌教育運動の出発を予告していた。

## 2 キリスト教主義学校の愛国唱歌教育運動

韓国におけるキリスト教の受容は、高麗時代の貴族社会から中国を往来する際に、洗礼を受けたことが嚆矢である。しかし、朝鮮は儒教を統治理念及び国教として位置づけたため、キリスト教は表から姿を消し、密教として存命したが、3回に及ぶ厳しい迫害を受け、その存在はほとんど見られなかった。しかし、開国のきっかけとなる江華島条約以後、日清戦争、日露戦争を経る間に、欧米宣教師の入国が認められ、布教事業が展開されるようになった。

キリスト教は、欧米勢力を背景とする部分もあり、朝鮮社会から容易に受け入れられ、急激な発展をみせ始め、間もない時期に「世界布教史の奇蹟」「東邦のイスラエル」<sup>19)</sup>と言われるほど発展を重ねた。

『独立新聞』の刊行方針は民衆啓蒙、自主独立、民族精神などが重要な理念であるが、『独立新聞』創刊者の徐載弼は、自身が篤実なキリスト教信徒であるため、事実上、キリスト教布教の目的も内在していた。そのことから、キリスト教を匂わせる記事が散見される。その事例を取り上げると、「われわれは、願望として朝鮮民衆はキリスト教に帰依し、教会の教えをそのまま実行することによって、民衆の模範になるべきである。不憫と無知の哀れな同胞兄弟の目を覚めさせなければならない。聖書の教えだけではなく、どのようにしたら、望ましい民衆になるかを教えることが信徒の使命である」<sup>20)</sup>と論じている。

しかし、当時はキリスト教を真剣に考える者がいれば、なめる者もあり、「9月18日、全州の鎮衛隊長（地方軍隊長）金ハンジョンが軍部（国防省）へ報告した内容によると、全州などで西学（キリスト教）を布教するという連中が道庁（県庁）を建てると言いながら、地方を歩き回り有力者に献金を強要したり、民衆の馬と銃を奪い取り逃走した。このような者は、カトリック信徒でもないし、改新教信徒でもない。教会では、彼らを厳重に注意すべきであり、地方官は容疑者を逮捕して厳罰に処すべきである」<sup>21)</sup>と訴えていることをみると、教会と信徒は、必ずしも救世を叶えたとは言えない事情が浮かび上がる。さらに、驚くべきことは、キリスト教監理会宣教師らは、駐朝日本公使館の外交官に対して布教活動を開始した。日本公使館参事官1名は、以前に専門学校に通っている時から信頼する校長にキリスト教の教理を教わっていた。礼拝の集会場所は日本領事の自宅で執り行われ、信徒は12名に達していた。<sup>22)</sup>

韓国におけるキリスト教の受容は多くの問題を抱えながらも、国威昂揚に力を入れ、1896年9月2日、キリスト教信徒らが慕華館で「大君主誕生慶祝会」を主催した。3,000名が雲集した未曾有の大集会であった。慕華館には入りきれず、外側の庭園に仮テントを設営した。《愛国歌》斉唱後、キリストに祈ると同時に、国王の聖体安泰と民衆の富強を願った。そして民衆が団結協力し、韓国の自主独立と国王、国旗を自身の命より大切にすることが求められた。<sup>23)</sup> このように、キリスト教が社会的に一定の認知を得ると、キリスト教宣教師らは「韓国キリスト教信徒の教養と文明が向上すると、韓国人牧師の教育水準を高める必要がある。その教育は民衆に尊敬を受け、権威ある者に養成するが、韓国人の平均水準より若干高い水準に止めなければならない。韓国人牧師が卓越な存在になると、信徒はいうまでもなく民衆からも猜忌、離脱を招く恐れがある」<sup>24)</sup>と注意を呼び掛けている。

どこの国においても、キリスト教の布教事業は、貧困国家や地域を対象に慈善事業、医療事業、教育事業を展開し、キリスト教の博愛精神を民衆に植え付ける。韓国も旧韓末時

代に、長い鎖国時代を終え、ようやく開国にこぎつけると、欧米宣教師、特にアメリカ宣教師の入国と布教活動が際立つようになった。

時代の変化は、韓国においても激動する19世紀後半の内外情勢とキリスト教の影響を受け始め、従来の詠嘆調旋律の伝統音楽に終焉を告げるが、新しい思潮に答えた音楽教育として唱歌が生まれた時代でもある。韓国最初の近代学校は、1886年に設立された培材学堂である。同校の学科課程は万国歴史、幾何、化学、土民必知、物理、唱歌、図画、体操、衛生、生理などであり、初めて唱歌が課されたことは、韓国音楽教育史の記念碑的な存在である。同校は、1887年頃から音楽教育が行われたが、教材は英語で讚美歌の1～2番を歌ったり、韓国語の翻訳歌詞で歌われたりした。音楽教師は同校設立者であり、米国人牧師であるアペンゼラー（Appenzeller）が担当したが、彼の死後は（1902年）、同年に就任した米国人牧師バンカー（Banker）が担当した。韓国人教師が赴任したのは、最初の本格的な音楽家である金仁湜であるが、彼は現在、韓国国歌《愛国歌》の作曲者とも言われている。

培材学堂における教育課程及び教育内容は、教養課程部を事例に取り上げると、読本、綴字、ペン習字、歌唱、算数初歩などが英語科目に含まれ（『培材学堂の年例報告書』1888～1889年）、英語で教えられた。教養課程部1年には英語（基礎文法、算数初歩、読本3巻、読本4巻、綴字、歌唱）と漢文、ハングル、2年には英語文法（算数、一般科学、読本5巻、綴字、翻訳、歌唱）と漢文、ハングル、3年には英語文法、英語作文、算数、漢文、ハングル、一般科学、知識の系統、言源学、美術、歌唱などが課されたが、歌唱は英語文法の一部として含められ、英語習得に歌唱を利用したと思われる。しかし、3年には歌唱が必修科目として位置づけられていた。当時の封建社会においては男児が英語で歌唱することは下品とみられていたが、開化思想をもつ先駆者として避けられない苦難を受け入れたと考えられる。<sup>25)</sup>

キリスト教主義学校の音楽教育と言えば、筆頭として女学校が取り上げられる。その代表的存在は、最も長い歴史をもつ梨花学堂である。当時、英国人女流旅行家イサベラ・バードは、同校を訪問した印象を監理教会、男女学校、病院などを含めて「場所として最良のところに建っているのは監理教会所属の建物群で、男子校と女学校、印刷所、連合教会、男女別の病院附属診療所がある。この教会付属の女学校はその機構と成果において、これまでわたしが見たなかでも最もすばらしいものの一つに数えられる」<sup>26)</sup>と記している。また、1890年、来韓したジョンズ女史が仁川に設立した永化学校においても、その頃、唱歌を教えたという記録が残されている。すなわち、「当時、音楽は唱歌と呼ばれたが、主に讚美歌を翻訳し、それを教えた」<sup>27)</sup>と記されている。

実際、韓国に洋楽を普及したものは、讚美歌であると言われるが、讚美歌がすべての唱歌に影響を与えたとは思えない。むしろ讚美歌そのものがオリジナルもあれば、社会から広く歌われる音楽から取り入れられたものも数多く存在する。このように、讚美歌の本質を捉えれば、讚美歌のある旋律がどこに使われたかによって分類されるだけで、それが学校教育の唱歌として歌われたという事実には過ぎない。音楽学者の李宥善氏は「この時期に教育機関を設立した宣教師らは、布教と共に讚美歌と音楽教育を並行させた。音楽と言っても器楽なしの歌唱だけに頼り、讚美歌以外の外国民謡も教えながら、それを唱歌と呼び始めた。韓国において唱歌が歌われた動機を知るためには、洋楽が韓国に普及した動機を探ることが望ましい。古来、韓国では唱歌という用語はなかった。とはいえ、民謡や韓国

歌謡がなかった訳ではない」<sup>28)</sup>と1890年代韓国の音楽教育の背景を論じている。

1892年、キリスト教北監理派宣教師部 (Methodist Episcopal Mission) における無名の韓国女性が讃美歌《イエスの高名》を作り「イエスの高い名前が 耳に聞こえた以来 すべての罪を無くす 死後の天国は間違いない 人間肉親の生まれた根本 生きて行くしかない 哀れな卑しい肉体 全く拘るな 天国が故郷なり 善良な魂が集まる」と歌われたが、この讃美歌は当時の様々な讃美歌集に最多掲載されたものであり、ことに1895年閔妃暗殺後、哀悼歌として民衆に広く歌われたものでもある。

ところが、当時、韓国人の歌唱能力はどのようなものかという点、イザベラ・バードの証言によれば、「讃美歌がそれぞれ歌いやすいばらばらなキーで歌われ」<sup>29)</sup>たという。ジョンズとロードウェラーが1896年に編集した讃美歌集を刊行すると、韓国には3種類の讃美歌集が流布された。<sup>30)</sup> 教会における讃美歌の役割は、教会を越えた一般社会にも影響を及ぼすことになる。それは学校教育に適用され、音楽教育として現われた。1896年、元山で活動したスワロン (Swallen) 女史は、複数の女学校を設立し、学科課程は読本、歌唱、そして聖書暗記を課している。

朝鮮時代は、儒教精神による厳しい男尊女卑の生活規範が強いられたが、男子のみに独占された教育が女子にも与えられることは容易にはできなかった。欧米宣教師が哀れな女性に教育を与えようと努力したことは、朝鮮社会に大きな刺激を与えたが、その事例の一つがスワロン女史である。彼女による女子教育の実践は、知識人に影響を与えたことはいままでもないが、『独立新聞』においても「朝鮮政府で最も急がなければならないことは、男子に教育を施しているが、女子にも教育の機会を付与しなければならない。朝鮮においては女子を人間として認めないから、初めから教育を受ける機会が与えられない。これは朝鮮人口の半分を切り捨てることと同様であり、深刻な人権問題でもある。学部 (文部省) は、男子も教えるが、女子も教えるべく、女学校を幾つか設立する必要がある。この女学校で女子が学校教育を受ければ、まもなく全国に捨てられた人口の半分は欧米宣教師が使える人口になる。国力伸張の観点からみると、これほどいいことはない。差別、無視された女子に男子自らが平等権を与えることである。これは常識に当たるものであり、男子の包容をみせる機会でもある。私たちは貧しくて無知な人の友であり、朝鮮の女子がこんなに男子に迫害を受けることに怒りを感じる。いつでも女子のために男子らと対決するつもりである。朝鮮女子は自分の権利を奪われず、ぜひ学問と教養を身に付け、男子と対等地位となり、男子ができないことを却って女子がやりとげてみせよう」<sup>31)</sup>と、当時としては想像を遥かに超える男女差別の廃止を訴える市民精神が台頭している。

このように、キリスト教関係者が韓国に対する文明開化と近代教育を支援すると、『独立新聞』(1896年8月21日付)は論説を通して、「韓国に在住する外国人の中で、もっぱら韓国人のために努力する者はキリスト教宣教師である。韓国人がキリスト教の本質を捉えるなら、彼らに感謝すると共に、善と愛がキリスト教の根本であることを悟るはずである。宣教師と婦人らは文明開化された祖国と家族を離れ、遠方にきて衣食住が全く異なる生活をしている。韓国人との付き合いが難しい上に、韓国人が我らの意思を理解できる能力がない。彼らの世界を知らず、互いに議論しても思想と文化が全く異なる。異国で自費で衣服や食事を備え、韓国青少年に教育事業を奉仕するだけではなく、病院も建てて医療事業を展開している。韓国人を罪もないのに処罰すると、信徒らは憤慨して正しい処分を求める。また、政治に関与しないため、政府内部で何が起きても中立を保つ。哀れな民衆のた

めに、正しい法律を制定し、民衆が団結して国を守ることが何よりも大切である。全国の民衆がイエスを信じ、その教えの通り実践するなら、感激せざるを得ないだろう。世の中に、様々な宗教があるが、キリスト教より善良、愛、救援を実践するものはない<sup>32)</sup>とキリスト教の信仰と社会に対する貢献を力説している。

このように、キリスト教主義学校は、西洋文明を欧米宣教師から直接に取り入れ、朱子学儒教の精神世界に少しずつ浸透していき、近代学校教育を通して韓国社会の変革を余儀なくさせる方向へと導こうとした。キリスト教主義学校とその音楽教育は、韓国伝統の儒教世界の知的価値と伝統音楽を根本から否定する行為となった。キリスト教主義学校の音楽教育は、単なる芸術教育に留まらず、学校教育の新たな姿と音楽教育の革新を呼び起こした源流となり、近代学校の音楽教育の普及に原動力を与えたと言える。

### 3 愛国唱歌教育運動と統監府の取り締まり

本稿は、民族学校及びキリスト教主義学校を中心に、近代韓国学校成立の歴史から愛国唱歌教育運動の前提過程を究明してきた。その愛国唱歌教育運動の中心内容は、文明開化、自主独立、忠君愛国などである。日清戦争、日露戦争の結果、戦勝国日本が韓国を支配すると、抗日唱歌が中心となり、愛国唱歌教育運動の基本思想は政治的、軍事的な色彩を見せ始める。愛国唱歌教育運動による文化的抵抗と抗日義兵を中心とする武力的抵抗が同時展開された。統監府は抗日義兵の掃蕩作戦と愛国唱歌教育運動の取り締まりが韓国統治における重大な課題となり、本格的に取り組むことになった。そこで抗日義兵に対しては、日本軍を投入し、全土に大規模の掃討作戦が展開された。私立学校における愛国唱歌教育運動の取り締まりは、兵力投入で解決できるものではなく、学部の僅かな官僚が私立学校2,250校(1910年)に対する取り締まりをすることは至難の学事である。そのため、義兵運動に投入された日本警察を私立学校の取り締まり要員として配置転換させたものが教育警察であり、前代未聞の特殊目的の警察組織が現われる。

事実上、韓国政府の学部大臣である学部次官の俵孫一は1908年6月、私立学校の取り締まりを開始する。この取り締まりは、私立学校の深刻な愛国唱歌教育運動のみではなく、統監府が管轄する公立学校にも広がり、愛国唱歌教育運動は韓国教育の重大な問題として浮上していた。その取り締まりの内容をみると、俵が公立学校に通知し、一般社会の教育実態を分析するため、各地に広がる諺や歌などを査察する必要があり、詳細に調査し、9月15日まで学部に報告するように指示した。その内容は、第一に、現在に流行している歌及び地域、第二に、現在に流行しないが、過去に流行した歌及び地域、加えて、流行の時期が明確なものはその期間の明記も求めている。<sup>33)</sup>

1908年7月、学部の招集で「第二次官公立普通学校教監会議」が開かれる。この会議は、統監府が日本教育政策を実行するため、全国主要都市に設置した官公立普通学校の教監を招集したものである。会議では、「唱歌科ヲ必須科トシ学部ニ於テ歌詞ヲ撰定スル件」が議題になり、義州公立普通学校の湯本は「余ハ非常ニ喜ビテ之ヲ習ヘリ、歌詞ハ師範学校教員ニ依頼センガ排日思想防止トナリ又教科トシテ興味アリタシ、サレバ此ノ過度時代ニ適セル簡便ナルモノヲ作りテ配布セラレナバ好果アルベシ義州地方ハ耶蘇学校ノ歌ヤ、守備隊ノ日本鉄道歌、征露軍歌等城内ニ流行セル故早く適当ナルモノヲ作りテ歌ハセタシ御賛成アリテ便宣ヲ与ヘラレンコトヲ望ム」<sup>34)</sup>と書記官の隈本繁吉に報告し、日本唱歌を普及して親日思想と同時に、キリスト教主義学校の音楽教育も牽制することを提案し、愛国



唱歌教育運動の取り締り以前の音楽教育政策が打ち出されている。

しかし、愛国唱歌教育運動は怒濤のように展開され、私立学校は排日思想に満ちており、統監府や学部は深刻な立場に置かれ、「学校の授業科目に不相当のもの多きこと」という記事を通して「現時多数の私立学校中京城内に於ては殆んど見るを得ざるも地方に於ける私立学校は其の学科の選択宜しからず即ち学校は德育智育体育を授くるものなることを俟たざるに拘らず或は喇叭を吹き操練をなし太鼓を叩くを以て之が課程をなし或は学校に於て學術を教授せずして日常野外運動を専らにするものあり恰かも学校とは喇叭を吹き操練をなし太鼓を叩く所なりと信じ居るもの、如し彼等は謂らく以て志気を鼓舞するなり以て体力を強壯にするなりと余は茲に至りて甚だ疑なき能はず国民一般の教育普及の目的は韓国の富強文明を図るにあらざるか進歩発達を冀ふにあらざるか斯の如く喇叭太鼓操練又は屋外遊戯の上達は以て此国を富強に導くものなりや徳性を磨き智能を開かずして独り体力を練り以て此の国の進歩を待つことを得るか願ふに父兄たる人々が時間と費用とを割きて大切なる子弟を学校に送るも学校に於ては徒らに喇叭太鼓操練の修習に熱中せしむるが如きは果たして父兄初め一般国民の希望する処と副ふべきや言ふ迄もなく斯の如きは韓国教育の目的にあらざるなり此の種の学校を其の俛に放任し益々其の弊を増長せしむるの空しく不親切なること敢て喋々を要せざるものにして須らく之を監督し之を矯正するは將さに一般国民の希望に副ふ政府の義務たるものなり」<sup>35)</sup>と述べているが、依の主張は、愛国唱歌教育運動の取り締りを厳しく批判すると同時に、智徳体という人間形成の理想論を主張し、排日行動に関わる楽隊や操練が学校教育の理念に反するものと断定している。しかし、学校教育はその時代と現実の未来像を教育理念として定めることが教育の本質であり、長い教育史の歩みをも、その活動の蓄積として構成されている。自国が崩壊寸前に置かれた時に救国を求めることは当然であり、救国思想抜きでは一般教育は学校と社会との隔離を助長することに過ぎない。

日韓併合が近づく1909年になると、日本の韓国占有に最も厳しく批判する『大韓毎日申報』は論説「困難は奮発を催促する」を通して、「どうして韓国教育界の現状を我慢することができるか。官公立学校はいうまでもなく、私立学校もその姿が変貌しつつある。統監府及び学部は干渉主義を徹底し、われわれの教育界の現状がどのようになったか。これも足りなくて私立学校に日本人を常置したが、それも足りなくて私立学校の唱歌教育を禁止すると報じた。この措置について韓国有志はがっかりし、悲しみに満ちている。これは教育界の首を絞めることであるが、返ってわれわれに絶好の機会がきたと考えたい。これをきっかけで、教育者はより奮発しなければならない。私立学校にも日本人を派遣すると、厳しく監督する。私たちはもっと奮発したい。愛国唱歌の斉唱を禁止することは悲しすぎる。しかし、民族意識のない一部の民衆も、今回の学校に対する日本の干渉をみると、民族覚醒の契機となり、韓国には却って喜ばしいことである。先人は三軍の司令官は捕まえるけど、匹夫の志は奪えないと言われるように、徹底精神を有する限り、いかなる試練も克服できる。最近、地方から伝えられた情報によれば、ある私立学校に日本人教師が赴任するという事実が知らされると、教師も生徒も全面解散し、学校は閉校となったという。しかし、この事態が事実とすれば、われわれも慨嘆する。日本人教師はいうまでもなく、天魔がきても学校教育は強行し、韓国を世界に恥ずかしくない大国として作るべきである」<sup>36)</sup>と呼び掛け、当時の教育救国運動に徹する姿勢がみえる。

このように、統監府の取り締りが激しさを増したが、当時は「平安道及び咸鏡道の私立

学校では、唱歌集における精神歌及び同胞覚醒歌は、教育上に不適當という内容で学部から禁止する<sup>37)</sup> という強制措置が発動され、北部韓国側で愛国唱歌教育運動がいかに激しかったかを物語っている。また、学部は「各学校から、不穩な歌詞を禁止するよう本年6月に訓令したが、未だに愛国唱歌を歌う学校があるから、首都漢城府及び各觀察道（県庁所在地）に訓令した。しかし、未だに中止しない学校があると言い切る。同時に、漢城府及び各觀察道に訓令しながら、一層の注意と嚴禁<sup>38)</sup>」を訴えていた。

また、学部は漢城府及び13觀察府に訓示し、各学校での不穩な唱歌を禁止したが、今尚忠清道内の私立学校では抵抗が続いている。治安に不穩当な『幼年必読』における《独立歌》や《血竹歌》、そして過激な唱歌を教師が平然な姿勢で生徒に教えている。これについて学部は「青年の将来を間違える誤りは教育上に有害な結果を招くだけではなく、社会治安にも甚だの被害を与えるので、各学校の愛国唱歌教育運動を嚴禁する」と警告した。<sup>39)</sup>

当時、排日思想や愛国唱歌教育運動は、圧倒的に北部韓国側（現在、北朝鮮）が主導したが、南部韓国側は北部韓国側に比べれば、積極的な姿勢は及ばなかった。その極端的事例として、全羅南道觀察使（知事）の申応熙は管下各郡に訓令を発し、各学校の排日思想や愛国唱歌、そして学校への寄付行為は禁じる<sup>40)</sup> という反民族的行為を厭わない高等官僚も存在していた。

愛国唱歌教育運動が統監府の韓国統治に重大な影響を与えると、学部次官の依は「甚シキハ其使用スル教科書ヲ見ルニ、時事ヲ憤慨スル不穩ノ文字ヲ以テ満タサレ、其歌唱スル唱歌ハ学生ヲ扇動スル危険ノ語調ニ充テリ<sup>41)</sup>」と批判したが、『大韓毎日申報』は「学部が唱歌教科書などを厳しく取り締まっても、民衆思想の統制は限界である。学部要員の巡回は到底不可能であり、統監府は警察を投入して愛国唱歌を嚴禁する<sup>42)</sup>」と報じている。

この警察政策が教育警察と呼ばれており、そこから提出された報告書によると「是等欧米宣教師が文明の祖国を去りて未開の朝鮮に入り不潔なる朝鮮人間に伍し幾多の苦辛困厄を意とせず、多くの資本と労力とを投じて、此劣悪なる朝鮮人の靈界に一道の光明を与へ慈善の何たる、正義の何たる、同情の何たるを知らざる朝鮮人の死せる精神界を蘇生せしめんとする貴き事業に対しては吾人は深く感謝の意を表せざるを得ざるなり、是れ吾人の常に基督教の活動を称揚して、仏教の惰眠と無能とを励声叱咤して止まざる所以なり、然るに此基督教徒の間に欧米崇拜熱の熾なると同時に、日本輕侮熱熾り、遂には排日熱の伴隨して抜くべからざるものあり、一たび基督教の会堂に日本人が入らば、教徒は傲然として之を睥睨し、輕侮し、其飼犬まで日本人と見ば吠へ付くと言ふ如き情勢あるは、吾人の常に親しく目撃して不快の料とする所なり、加之甚しき例を挙げれば安重根、安命根の如き凶漢は此基督教徒の間より輩出せり檢拳されたる陰謀団の如きも殆ど基督教徒なりと称せられ、基督教界の立て者として欧米宣教師間にも教徒間にも声望高き尹致昊の如きすら此暴拳に連累ありと云ふに至りては吾人の絶驚して基督教徒間の心事を疑はざらんとするも能はず、基督教宣布の利害を疑はざらんとするも能はざるなり、由来朝鮮人は靈界の光頗る鈍く、哲学とか文学とか宗教とかいふ、精神界の趣味甚だ乏しき民なり、殊に儒教的感化を受けたる中流以上の朝鮮人は基督教にせよ、仏教にせよ、宗教は異端として排斥する所なり、故に基督教に帰依する者は儒教主義の感化無き下層の迷信の徒か、又は彼らに接近して衣食の便を得んとするものかに過ぎず、然して又旧韓国時代に於ては、朝鮮官吏の誅求を教会に逃れ、冤罪を欧米宣教師に泣訴せんとして入教するもの多かりき<sup>43)</sup>」と統監府の教育警察の取り締りが通用しないことを示すと共に、民衆は日本の保護政治を否定

した。そして宣教師については、排日運動の後援を指摘し、批判的な論調となっている。言い換えれば、日韓併合後、キリスト教主義学校を中心とする私立学校では、宣教師の擁護を受け、引き続き愛国唱歌教育運動が展開されたことを示唆している。実際、独立運動においては、抗日運動歌が多く歌われたが、いずれも愛国唱歌教育運動の延長として考えられる。

## おわりに

北東アジアに位置する韓国は、長い歴史からみると、中国の影響を強く受けた。しかし、韓国から中国に対する認識は、文明発祥地として敬慕したため、中国に対する抵抗意識は予想するより、遥かに少ない。そのため、中国の政治、制度、経済、教育などあらゆる分野を移入し、自ら「小中華」と称する時代もある。このように、中国に傾倒した韓国は、教育においても書堂、郷校、成均館など中国の教育制度を永年模倣すると共に、官僚登用も科挙制度を踏襲した。

しかし、日露戦争後、韓国は主権を失い日本の保護国となると、新生日本に対する文明や制度などは受け入れようとせず、激しい抵抗を展開した。日本の唱歌教育も韓国の学校教育には受け入れられないという傾向が強かった。その理由は、統監府や学部が西洋音楽の唱歌として普及させようとしていた日本唱歌より、欧米宣教師から西洋音楽を直接に取り入れることが音楽教育として魅力があったからだと思われる。

愛国唱歌教育運動は、日本の保護政治に対する文化的抵抗でもあるが、キリスト教主義学校や教会を通して、新しい音楽教育、西洋音楽の普及過程でもある。当時の史料、証言などを分析すると、占有側の官公立学校より、韓国側の民族学校やキリスト教主義学校の音楽活動のほうが遥かに上位である。

さらに、欧米を背景とするキリスト教主義学校の愛国唱歌教育運動は、統監府や学部が思うまま取り締りができない情勢に影響され、十分な成果を挙げられなかった。この事態を收拾するため、組織された教育警察の存在が浮かび上がったが、教育警察も刮目に値する成果は上げられなかった。

韓国併合後、寺内正毅、長谷川好道、斉藤実などの全員が陸軍大臣を歴任したことをみても、愛国唱歌教育運動及び抗日運動の取り締りが重要な任務であることがわかる。

## 注

- 1) 魯東銀『韓国近代音楽史』ハンキル社、1996年、589頁。
- 2) 同上書384頁。
- 3) 同上書348頁。
- 4) 柳徳熙『世界音楽教育史』学文社、1983年、451～452頁。
- 5) 『独立新聞』1896年5月9日。
- 6) 『独立新聞』1896年5月19日。
- 7) 柳徳熙『世界音楽教育史』451～452頁。
- 8) 魯東銀『韓国近代音楽史』324頁。
- 9) 同上書391頁。
- 10) 『独立新聞』1896年5月26日。
- 11) 『独立新聞』1896年5月9日。

- 12) 魯東銀『韓国近代音楽史』94頁。
- 13) 同上書342頁。
- 14) 同上書328頁。
- 15) 『独立新聞』1896年7月7日。
- 16) 『独立新聞』1896年7月16日。
- 17) 同上書342頁。
- 18) 『独立新聞』1896年9月22日。
- 19) 閔庚培『韓国教会賛頌歌史』延世大学校出版部、1997年、269頁。
- 20) 『独立新聞』1896年9月3日。
- 21) 『独立新聞』1896年10月6日。
- 22) 白樂濬『韓国改新教史』延世大学校出版部、1985年、196頁。
- 23) 『独立新聞』1896年9月3日。
- 24) 白樂濬『韓国改新教史』延世大学校出版部、1985年、226頁。
- 25) 李萬烈『韓国基督教文化運動史』大韓基督教出版社、1992年、219頁。
- 26) イザベラ・バード、時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社、1998年、89～91頁。
- 27) 永化女子中学校『永化70年史』1963年、57頁。
- 28) 李宥善『韓国洋楽百年史』音楽春秋社、1985年、170～171頁。
- 29) イザベラ・バード『朝鮮紀行』445頁。
- 30) 白樂濬『韓国改新教史』376頁。
- 31) 『独立新聞』1896年9月5日。
- 32) 『独立新聞』1896年8月21日。
- 33) 『皇城新聞』1908年6月18日
- 34) 学部『第二回官公立普通学校教監会議要録』1908年7月、77～82頁。
- 35) 「学部次官『韓国私立学校取締に就いて（私立学校令発布の理由）』』『朝鮮』第2巻第4号、1908年12月1日、9～10頁。
- 36) 『大韓毎日申報』1909年6月10日。
- 37) 『皇城新聞』1909年6月5日。
- 38) 『皇城新聞』1909年10月27日。
- 39) 『皇城新聞』1909年11月7日。
- 40) 『皇城新聞』1909年7月8日
- 41) 『韓国教育ノ現状』1910年。
- 42) 『大韓毎日申報』1910年1月27日。
- 43) 「朝鮮の基督教徒問題」『朝鮮及満州』第49号、1912年3月1日、49頁。